

『有明の別れ』における出生の秘密

——作品後半の構造と『主人公』——

松浦 あゆみ

はじめに

院政期末頃成立の『有明の別れ』は、『とりかへばや』を踏まえた男装の姫君の物語として知られているが、実際には、当初の主人公女右大将が男装を解いた後のエピソードの方が作品の大部分を占める。その中で作品後半の巻二・巻三においては、出生の秘密が、作品の主題・重要なモチーフとして従来論じられており、その内実は複数の物語展開群の同時進行とみなされる事が多かった。しかし、女右大将の嗣子左大臣が出生の秘密を知るまでの文脈については、従来指摘されてきた、左大臣中心の物語展開の枠内に留まらず、一見無関係な他の人物中心の物語展開とも連動し作品後半全体にわたって進行していくのではないか。作品を論じる上で、この文脈の重要性は最近注目されてきているが、本稿では、諸論を踏まえつつ、叙述の中心となる『主人公』の観点から改めて、出生の秘密をめぐる作品構造を考察する。

一、左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開をめぐる問題の所在

『有明の別れ』の孤本天理図書館蔵本（以下、天理本。表題「在明の別」）の末巻巻三は、中宮付きの侍従内侍が、中宮の兄左大臣（二十歳余）に、彼の出生の秘密を打ち明ける場面で終わる。亡き右大将の遺児として育てられた、左大臣の出生の秘密とは、母対の上がその義父関白（当時は左大将）に無理矢理関係を強いられて妊娠、苦境に陥った所を、関白の甥に当たる右大将に連れ出され『結婚』、出産した、という経緯であった。妹中宮も、実は『結婚』後の対の上が、さらに別の男、関白の息子内大臣（当時は三位中将）に強姦された結果、生まれた子である。左大臣の『亡父右大将』とは実は女右大将、現在左大臣が恋い焦がれる女院が男装していた時の姿に他ならない。死去とは偽りの公表で、帝（現在の院）との契りをつきかけに男装を解き、一人二役の姫

『有明の別れ』における出生の秘密

君になりすまし入内、出産、立后を経た後、帝の讓位と共に女院宣下を受け当帝・春宮の母、及び左大臣の父方の叔母として今に至っている（以上は巻一。次頁の人物關係略図参照）。侍従内侍——元來は左大臣・中宮兄妹の亡母対の上に「一人心しらふ侍従」（巻一P76）で、兄妹の出生の一部始終を知る女房——の告白は既に中宮に対し行われており、左大臣に対しても、彼の実父内侍が死去し侍従内侍自らも重病で出家したのを機会に、行われようとしているのである。天理本の末尾では、その告白内容が記されていないまま終わっており、この後にあるのは、同筆だが改訂の後五行に書かれた歌のみである。このような天理本に対しては、末尾散逸説が出されている。²⁾

ただし、本稿で問題とするのは、天理本の完結性ではなく、作品後半開始から出生告白に至るまでにおける告白の重要性である。孤本天理本の完結性について決め手が得られない現段階では、完結性如何に拘わらず論を進めていく便宜上、末尾散逸説を仮に採り、散逸した別のエピソードが本来は作品の結末であった場合——即ち、出生の告白が作品の結末としての意味を持たない場合——を想定して検討する。その場合、問題点として注目されるのは、巻三末尾に「散逸部分が続く」中で、「結末としての意味を持たない」出生告白が作品後半に占める意味である。左大臣への出生告白の前には、女院「女右大将から次男春宮への資質継承の物語展開が描かれており、従来「散逸部分」として想定されているのは、この綴じ目にあたるエピソードである。女右大将は、男

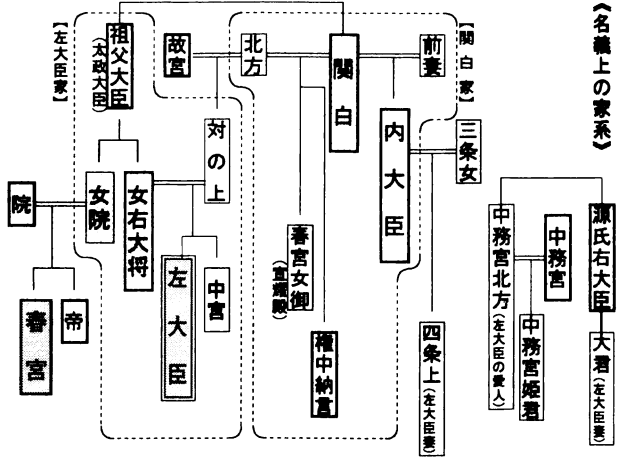
装時に超常的な笛の才を發揮し、男装を解いた後も、自身の再来と目される春宮へ伝えるのであり、作品全体を通じた物語展開となつている。³⁾これに比べ、左大臣は、作品後半における「中心人物の一人」であり、出生の秘密告白は、左大臣中心の物語展開における単なる綴じ目ともみなせそうである。

しかし、ここで作品後半の始発部を振り返ってみよう。左大臣は、巻二冒頭「なににしのおのと留め置きて」という「後撰和歌集」歌（雑二一一八七）の引歌表現で、作品前半の主人公「亡き右大将」の遺児として単独で脚光を当てられ、巻一で「光隠れ給」（P174）う「亡き右大将」に代わり、巻二ではあたかも（統篇主人公）となるかのように、叙述の中心に据えられているのである。この体裁が、「源氏物語」（以下「源氏」）の薫をめぐる物語展開をなぞりながらも、いかに変奏しているかを、まずは概観することにより、「有明の別れ」における問題の所在を明確にしていこう。なぞられているのは、匂宮巻冒頭表現「光隠れ給ひにし後」で、超絶的な資質を持つ（正篇主人公）光源氏の死が告げられた後、「子」である（統篇主人公）薫が、実は光源氏と血筋が繋がらないという出生の秘密を抱え、やがて出生告白を受けるに至る一連の経緯と作品の二部構成である。しかし、（正篇主人公）女右大将の死去が偽りで、作品の構成が実際には分割し得ない相連点もさりながら、物語展開に対する告白の影響は、匂宮巻当初より疑念を抱いていた薫の場合と著しく異なる。確かに、出生告白の役割を担う侍従内侍についても、「源氏」柏木・女三宮

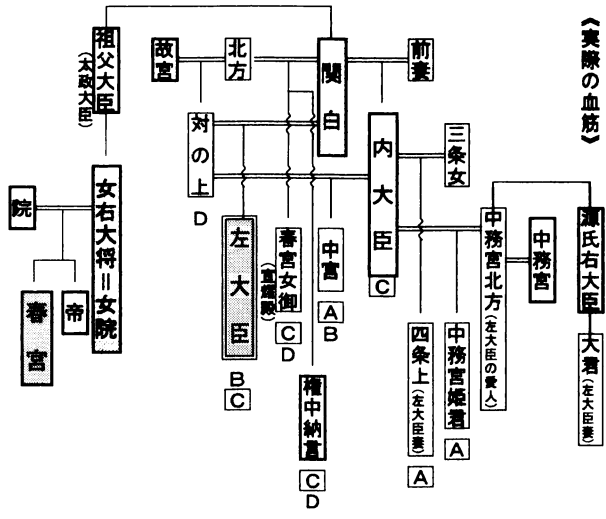
登場人物関係略図

※大槻注(1)(5)書・今西注(15)論文・横溝注(7)論文・岡本注(8)論文の各図を参考に作成した。
 ※左大臣・春宮・帝に関する婚姻・恋愛関係の図示を便宜上省略した。

〔名義上の家系〕



〔實際の血筋〕



- 注A 内大臣の子
 B 対の上の子
 C 關白の子
 D 關白北方の子
- ※ただし、内大臣と春宮女御・權中納言は、名実ともに關白の子で異母きょうだい関係
- A 異母きょうだい (秘められた血筋)
 ○B 異父きょうだい
 ○C 異母きょうだい (秘められた血筋)
 ○D 異父きょうだい

『有明の別れ』における出生の秘密

密通の仲立ちをする女三宮の乳母子小侍の役割を継承し、かつ問はず語りで薫に出生の秘密を明かす柏木の乳母子弁の役割をも兼ねる事が指摘されている。だが、橋姫巻の弁の問はず語り子が主体となる物語展開の比較的最初に位置し、匂宮巻での薫の疑念に答えるような形で明らかにされ、諸考論じるところの宇治十帖における恋の展開への転機をなすのに対し、侍従内侍の問はず語りを受ける左大臣は、全てが進展したこの時点まで何も知らずに至っている。それゆえ、左大臣が知ることになるのは、単に出生の事実というだけに留まらず、秘密を知らないまま告白の時点まで行ってきた言動の真の意味ということになる。しかも、秘密を知らないままの状態は、「末尾散逸部分」が仮に存在していたとしても、卷二全てと卷三の大部分、即ち作品後半の殆どに及ぶ。告白までのこの過程で、いわば「左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開」が想定されるのである。しかし、秘密に関わる各場面で実際に描かれた左大臣の心情となると、ほとんど反応は描かれていない。そこで、「左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開」とは、出生の秘密告白に至るまでの各場面で、気付かない左大臣の姿に対し、読者側が真相との落差や気付かない状態によつて生じる作品構造をその都度読み取り、告白の時点で、それらの意味を再確認するべきものとなるのである。

その際、作品後半全体に関わってくる内容とは何であろうか。まず最初に、念頭に浮かぶのは、左大臣の叶わぬ恋と近親相姦等の危うさ——前述卷二冒頭に続き心情が述懐される、「実は名義

上の父^①」である女院、及び「実は異母妹^②」である春宮女御への恋——をめぐる文脈であるが、この文脈だけでは、左大臣以外の登場人物中心の物語展開との関連を見出し難い。

これに対して、作品全体に関わってくる内容として注目されるのが、父子関係をめぐる文脈である。その際左大臣の場合は、実父との関係よりも、名義上の父との関係の方が重要となる。実父関白は、特に作品後半ではさほど言及されるわけではなく、侍従内侍の秘密告白は、おそらく左大臣が不孝の罪を背負う事をも「罪深かるべきこと」に感じたためではあるが、抑も実父の死去あつての出来事なのである(P480)。このような実父の扱いの軽さに比べ、名義上の父女右大将との関係は、主題的展開となる「家」の存続の問題でもある。「家」の存続の必要性こそが、左大臣家を継ぐ男子不在による女右大将の男装から始まって、この作品全体を貫く論理である事は、院政期の時代状況等との関連で、従来論じられるところである。左大臣を懷妊中の母対の上が連れて来られたのも、嗣子の獲得のためであつた。名義上の家系側の必要性によつて生じた結果だけに、左大臣が女右大将と血縁の繋がりが無いのを知った時、本人の心情面では、「運命の翻弄」に因る、叶わぬ恋の閉塞性や、類いまれな女右大将の血筋からの疎外を思い知るであろうが、嗣子としての立場に何ら変わる事はない^③。

出生の秘密に関わる以上の傾向を踏まえ、本稿で、作品の構造上における左大臣の役割面から注目するのが、前述した叙述の特

徴——即ち、左大臣を、巻二冒頭で女右大将の遺児として紹介し、その立場を前提とした上で、巻二の間は叙述の中心に据えるあり方——なのである。左大臣本人が真相を知らないというだけに留まらず、作品前半において描かれてきた出生の真相が、作品後半ではほとんど等閑に付された叙述といえよう。しかも、〈統篇主人公〉の装いで登場したにもかかわらず、巻三になると「中心人物の一人」へと転じてしまうわけである。その特徴を生じる原因を、以下説き明かしながら、作品後半全体に及ぶ〈左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開〉の文脈を、左大臣が名義上の父女右大将の「子」としての役割を利用される経緯として、叶わぬ恋との関連も含め考えていく。

二、巻二における役割

——作品前半の後日譚的展開の構造

巻二のエピソードは、左大臣の視点とそれに伴う言動を中心に叙述される部分が殆どであり、それも女右大将が活躍した巻一の後日譚的展開が多いのは明らかである。作品前半で活躍した女主人公が男装を解いた後を受けて事態を收拾する後日譚的展開という点では、「とりかへばや」をなぞつていよう。だが、「とりかへばや」今本（現存する改作本）におけるきようだい入れ替わりの場合とは異なり、「有明の別れ」における左大臣の役割は、匂宮三帖における薫の場合同様、女右大将と血筋の繋がった子でなく

とも果たせる内容が多い。巻二の主な物語展開である左大臣の恋愛遍歴のエピソードは、巻一で内大臣と三角関係だった女双方の後日譚的展開を結果的に兼ねているにすぎない。しかし、実質的には、目的や手段（隠れ蓑の術の有無）の差こそあれ、巻一での三角関係の成り行きを垣間見していた女右大将の役割も受け継ぐ形となっているのである。彼が「正篇」巻一の続きの進行をただ見ているだけでも、読者側は、「正篇主人公」女右大将との連続性を感じるのには確実であろう。

しかも、役割継承の次元に留まらず、既に指摘されているように、作品後半始発部における左大臣は、他の男性登場人物達との比較で、彼らとの実際の血縁関係からは考えにくい優越性がある。かのように述べられており、あたかも左大臣家の嗣子という立場が即ち女右大将と血筋の繋がった子ととれるようにも描かれている。作品後半開始に先立つ巻一末近くで既に、左大臣とかつて縁談があった春宮女御入内の際には、「父」女右大将に「思ひなし¹⁵肖え給へるにや、にほひこよなく」、「かの御あたり」即ち女院II女右大将の実子たる春宮に優越すると述べられる（P.224）。巻二に入ると、前述冒頭の左大臣の紹介及び叶わぬ恋の苦悩の述懐に続くエピソードで登場する権中納言は、左大臣より四歳年上の「実は異母兄」のはずだが、「同じ司・位こそあれ」、「優勢の左大臣家を継承した彼に「思ひなしにやこよなくぞ氣圧され給へる」と劣るかのようになされているのである（P.234、236）。これは、出生の秘密を暗黙の了解として言及しない姿勢とは、異なる。

さらには、物語展開上の役割でも女右大将の「子」としての立場が深く関わるのが、巻二半ばにおける承香殿の女おんな（元女房）の大原隠樓・往生なのである。女右大将の男性的生活の後日譚に当たるこのエピソードにおいては、左大臣はまさしく子としての立場で関わっており、その進行に際しては、立場という以上に、ないはずの血筋のつながりまで問題となってくるのである。問題の所在をさらに明らかにしてみよう。

出産を控えた中宮の御惱祈禱を依頼しに横川の前僧都を訪問した掃途、左大臣が大雪の難を避け立ち寄った所が、かつて女右大将に思慕を寄せた承香殿女の庵であり、「亡き右大将」への未練を左大臣から聞いた女院は、男装時の筆蹟で書いた文を腹心の女房に庵の籬へ落とし置かせ、承香殿女は思い残す事なく極楽往生する——というのが、エピソードの概要である。この際注目すべきなのは、今は尼となった承香殿女が問わず語りに語り出すきっかけが、左大臣を女右大将の（ゆかり）＝縁者と感じた事だった点にある。ゆかりと確信したのは、左大臣が「亡父」右大将から隨身を引き継いでいた為とはいえ、「なべてならぬ」左大臣の「けはひ」に「さにかや」と「なつかし」く感じ、「思ひかけぬかりに告げん」⁽¹⁶⁾と前置きしてから語り出すのである（P.340）。

これを、左大臣がその場限りのきっかけとして役割を果たすために便宜的に設けられた、承香殿女の単なる思い込みとして処理することはたやすい。承香殿女との遭遇後には、左大臣の報告を受けた女院、即ちかつての女右大将の視点へと転じる。それ以前

の時点、左大臣の恋愛遍歴と関連し右大臣大君との縁談が起こった際に、彼の出生の真相は、その女院思慕と対比する形で、女院「女右大将の述懐において、「有り難くてたばかり出でたる人なれば」^(P.286)と、ほのめかされてもいた。結果的には、他の出来事も含め作品前半の後日譚として、真相を全て知る女院「女右大将のまなざしへと収束するのである」⁽¹⁷⁾。

しかし、後日譚の進行の必要上にせよ、偶々行き合わせた承香殿女が左大臣を女右大将の子として認定する事は、不可欠なききっかけである。一章で触れた「源氏」橋姫巻における弁の出生告白の趣向にも似る。ただし、弁による柏木の（ゆかり）としての認定が隠れた（ゆかり）を確認する自然な成り行きなのに対し、「有明の別れ」の承香殿女の場合は、偽の（ゆかり）のあり方を浮かび上がらせるのではない。承香殿女の間わず語りに対し、左大臣が、「亡父」の「声、けはひ、笛の音、全て何事につけても、いかやうにもし給ひけむと、思ひやらぬ時なき」と語っているのは注目されよう（P.342）。女院「女右大将への叶わぬ恋に悩む一方で、超常的な才を備えた「亡父右大将」の子である事を疑わない左大臣のあり方が、地の文で言及されない出生の真相との落差から浮かび上がるのである。こうした叙述は一時的にせよ、同じく「源氏」竹河巻で、薫と柏木との相似を慨嘆する玉鬘の言葉に対し地の文で言及がないのと、同種の効果とみなせる。⁽¹⁸⁾

だが、「有明の別れ」の場合は、それ以上に複雑な様相を呈しているのではない。真相が地の文では言及されない事で、一瞬

だけにせよ、女右大将の子としての左大臣が存在した上で、作品世界は進行する。のみならず、巻二全体の叙述でもやはり、前述右大臣大君との縁談時のほのめかしを除き、左大臣の出生の秘密は言及されず、そればかりか異母兄に対する優越性までも述べられるわけである。真相との落差を抱えたまま、女右大将の子である事を前提として、出来事が堆積していく成り行きが窺えよう。

これは、続く巻三との関わりを考える上で、重要な特徴と考えられる。一章で述べたように、巻三は、左大臣以外の人物中心のエピソードが多いが、女右大将から春宮への資質継承の物語展開では、女右大将の「子」としての左大臣のあり方も言及されているのである。そのエピソードに先行し、左大臣の異母妹中宮への出生告白をめぐる物語展開が置かれている。まずは、この物語展開と左大臣との関わりを、検討していこう。

三、巻二から巻三へ

——異母妹中宮への出生告白における転換点

中宮に出生の秘密が告白される物語展開は、巻三に入り表面化するが、この前段階にあたる文脈が、巻二における左大臣の恋愛遍歴に伴う見聞の内容に含まれている。それが、前章において言及した、内大臣との三角関係が途絶えた二人の女の後日譚で、内大臣の娘探しの一環としても位置づけられている物語展開である²⁾。左大臣は、忍び歩きで垣間見た姫君達（中務宮姫君・四条

上）がいずれも中宮と似通っているのを目撃する。つまり、内大臣の知らぬ間に、三角関係が途絶えた直後生まれた娘達の存在が、女右大将の「妻」強姦の結果生まれた中宮と併せて明かされるのである。このうち、左大臣が関係を結んだ方の娘（四条上）については、前述承香殿女の隠棲発見のエピソード直前の時点で、実父内大臣の知る所となり、母娘引き取りへと進展する。

承香殿女発見の場合同様、左大臣の垣間見は、あくまでもきっかけで、いわゆる視点人物としての便宜的な扱いにすぎなかったとみなすのは、たやすい。作品前半における主人公の嗣子として、自身の恋の物語展開と併せ、父や他の登場人物の恋や出生の秘密を見聞することで、父達の恋と結婚のあり方を、限られた見聞の範囲で顕わにしていって役割としてみなせよう。ここでは、「源氏」野分巻から横笛巻にかけての夕霧のあり方をなぞっていると考えられるため、夕霧との比較を通して、左大臣のあり方を明確にしていこう。左大臣の思慕は、院との睦まじい結婚生活を送る女院へに見るだけの恋という点において、夕霧の義母紫上への恋と近似を見せている³⁾。内大臣の三角関係における娘の出生見聞に関しては、柏木密通をめぐる薫の出生見聞が想起されよう。しかも、玉鬘や薫の出生に関する疑いを抱くのが特定の時点迄で終わる夕霧以上に、左大臣は気付かない人物で、「いかなるにか、おぼえぬ火影に、なほあやしく思ひ出らるるぞ心得られぬ」（P 278）、或いは中宮を「例の、常に見きこゆるけにや」（P 304）等と、一瞬不審を抱くものの、すぐに自身の恋心に転じてしまう。夕霧の場

合以上に、垣間見る本人の心情の整合性よりも作品全体の物語展開が優先される傾向が強まったとも考えられよう。しかし、見逃せないのは、左大臣が、出生の秘密とは無関係であり続ける夕霧の場合と、立場を異にする点である。中宮は、左大臣と実父こそ違え、母対の上、名義上の父女右大将を持つ〈類例〉として考え得る。二章で前述した、薫の出生をめぐる『源氏』の継承のうち、主人公の妻の密通が出生を招く部分は、中宮の場合へと分かたれた形となっているのである。以上は近親相姦の危うさとして指摘されている文脈であるが、同時に〈類例〉の秘密との遭遇をも意味している。承香殿女隠棲のエピソードにおける場合同様、気付かない左大臣の姿を描くからこそ、女右大将の“子”としてのあり方が浮かび上がると言えよう。

こうして、兄左大臣と関わりつつほのめかされていた、中宮の出生の秘密が、巻三に至って、内大臣による実父の名乗りで表面化する。打ち明ける役割を担うのは、冒頭でも触れたように、左大臣の場合と同様、母付きの女房であった侍従内侍である。廻行させての類推は危険ながらも、左大臣の出生の秘密が明かされるまでの流れで、〈類例〉中宮に対する出生の秘密の告白は、恋愛遍歴の中で左大臣が果たしてきた女右大将の子としての役割における転換点と考えられるのではないか。中宮の反応（P 418・420・424・426）は、名乗り直後の実父死去を一応悲しみ不孝の罪を恐れはするものの、名義上の家系の生まれでなかった事への失望が強く、しかも女院⇨女右大将の正体には何ら言及がない。密通によ

る出生に対する衝撃で中宮としてのプライドが失われる点等は事情が異なるとはいえ、左大臣の反応も、類似の予想が可能である。もちろん、左大臣の場合は、女院思慕の関係上、女院⇨女右大将の正体告白も想定されよう。だが、『末尾散逸部分』次第で決まるにせよ、少なくともこの時点ではどうであろうか。侍従内侍は、男装を解いた後の女院が正体を明かす際に言及されていない（巻一 P 184～190）。必ずしも女院の正体が明かされていないというわけではなからうが、女院思慕の文脈以上に、父子関係、それも名義上の面に関する文脈の重要性が認められる。

以上のように、左大臣の出生の秘密が顕わされるに至る文脈が発動し始めたとみるならば、彼が女右大将の“子”として果たしてきた役割は、いかなる内容へと転じるのであろうか。巻三半ばで女院⇨女右大将から次子春宮へと資質継承が達成される物語展開との関わりを、次章で検討していこう。

四、巻三における役割

—— 女右大将から春宮への〈光〉継承の文脈

左大臣と春宮——女院⇨女右大将の義子と実子——は、各々異なる次元で資質の書き分けがなされているともみなせようが、二者を比較する文脈は、天人降下をめぐる物語史の観点から既に指摘されている。この文脈を、家の継承と政道の継承の面から改めて注目し、作品構造を確認していこう。

女院と左大臣とは、真相の明かされない当初から既に、「叔母・甥」の間柄といえども実質的には家の継承の必要上生じた親子関係に近いものが窺えよう。巻二では、冒頭表現に続いて左大臣の叶わぬ恋の増す苦悩が綴られる中で、女院から家の嗣子に伝えるべき政道が熱心に伝授されている背景が明らかにされている。²⁸⁰左大臣の方も、母対の上による世話よりも「まことの御親」として女院を頼りにし（巻一 P 226）、恋の苦悩のあまり遁世を思う際にしても「思しめしさいなまん」（巻二 P 232）という親の叱責を恐れるような意識を抱いている。それゆえ、彼の女院思慕は、近親相姦に対する禁忌の傾向さえ帯び、至高の女性思慕という以上に、閉塞性の度合いを強めているのである。

対する春宮については、かつて巻一末近くの女御入内の際には、前述のように、男性的魅力の面における左大臣の優越も述べられていた。それが、女院が箏の琴の奏を制止された虫合の宴の後、翌日の時点になると、女院から春宮への笛伝授と才の素質継承が、「世の人もこの大臣もさらに伝へ給はぬを、さし越え」と、左大臣を引き合いに出して描かれる。ただし、女院の偏った笛伝授に対し、実際に恨み言を言ってみせるのは春宮の兄帝であり（P 278、²⁸⁰）、当の左大臣は、女院による箏の琴演奏に恋慕を募らせる一方である（P 274・280）。この時点の両者は、楽継承と家・政道継承という異なる次元で棲み分けをしているともみなせよう。

しかし、巻三に入り、左大臣の恋愛遍歴・結婚をめぐる中務宮北方の物怪事件が収拾した後、中宮が生んだ一宮御五十日の時点

では、春宮への政道伝授の達成も述べられる。

（前略）げに何事につけても、また類ひきこえさせたる人（女院）のあり難きこそ口惜しけれ。さはいへど、左の大臣こそは、よろづ教へおはする御言の葉につけても、なべての人に異なる御才のきはなれど、片へは、かの御心も慎ませ給ふに、思しめすばかり、えあきらめさせ給はねば、ただ春宮にのみぞ、とりわき、いはけなくより、朝夕よろづを聞えさせ給ひしかば、何事につけても、ただ光隠れ給ひし故大将の御代りには、この宮のみぞ末の世照らせ給ふべき。（P 406 ※底本二重線部ナシ）つまり、春宮は、作品前半の主人公女右大将の楽継承者というだけに留まらず、「故大将の御代り」として、主人公にふさわしい超常的な資質の総体（光）を得る者とされる。これに対し、巻二で女右大将の「子」として活躍してきた左大臣は、巻三で春宮の類い稀な資質が次第に強調される文脈にあつて、再び比較対象とされているのである。もちろん、左大臣に伝えられた政道と、春宮に伝えられた帝王学とは、元来性格が異なる面もある。しかし、引用文波線部により、左大臣が優れた才を持つにも拘わらず、「かの御心」、即ち女院思慕を抑える事が、女院⇨女右大将の政道継承の機会から遠ざける結果となった経緯は、明らかである。

そして、中宮への出生告白が実父内大臣の死去で締めくくられた後、資質継承の素地が整った春宮による超常的な才発揮は、朱雀院四十賀宴で成就する。朱雀院四十賀の開催にあたり、春宮は「今の代の君達」と比較の上で「光を添へさせ給へり」と一層

賛美されている（P 434）。その際、母女院との相似ゆえ、母の兄弟³⁴、右大将の容貌も継承したとされる中にも、「故大将の忘れぬ面影も、あらぬ方に伝はり給へる」と直系の伝えない旨述べられる。ここでも「子」左大臣の存在が一応念頭に置かれていると考え得る。賀宴では、春宮の横笛と母女院³⁵、女右大将の琵琶との母子合奏により、女右大将男装時には実現しなかった天人降下が起きる。その際、春宮の身を案じた院の命で宮司の昇進が決まった際、「つれなく舞踏し給ふ」左大臣の姿が描かれるが、この直前に「さるは、故右大将殿の御末にははづかしかるべき御身の天人うとさぞかし。」と、春宮のように天人降下を招くべくもない左大臣を、さりげなく揶揄するかのような寸評がされていた（P 442～444）。同様の叙述は、巻一で内大臣（当時は宰相中将）が笙の笛を奏した如月の花宴でも「あまくだる天人もなければ、そこはかとなくて、こともはてぬれば、皆まかで給ふ」（巻一 P 212）という寸評がされていた³⁶。しかし、内大臣達とは異なり、左大臣の場合、女右大将の子として資質継承は当然との前提で、春宮と比較した直接的な批評として、明らかな差がある。

しかも、春宮との比較の文脈は、教養の次元に留まっていはいない。朱雀院四十賀以降において、左大臣は、二人の妻の出産が左大臣家の繁栄へと繋がる展開を辿っているが、それにも増して叶わぬ恋の苦悩へと回帰している（P 446）。その結果生じた「実は異母妹」春宮女御への侵犯の試みが、春宮女御の拒否、即ち密通未遂に終わっている。巻三における、このような経緯は、女右

大将の子として優越して生きてきた、左大臣本人の失望を描く文脈であり、かつ近親相姦の危うさが読み取れる文脈も含まれている³⁶。それと同時に、作品構造の次元においては、超常的な楽の才に続き、春宮の男性的な力を際立たせる役割も果たしているよう。春宮女御が左大臣を拒み通す理由は、春宮の〈光〉に「言ふかひなく思ひしみて」（P 458）いるためなのである。続いての嵯峨野行幸・行啓のエピソードにおいて、兄弟よりも「御光」の類いなさで優る春宮は、見舞った祖父入道大臣からも、帝の場合より「今少し」政道を伝授され、母女院から、男装時の自分の〈光〉再来としてみなされる（P 468～472）。

これらの検討を通じて、春宮が、作品前半の主人公女右大将の全面的な資質〈光〉を受け継ぐ巻三の展開にあつて、女右大将の「子」左大臣が比較対象とされている事が明らかであろう。その際、左大臣の叶わぬ恋も、結果的には、春宮が全ての面で優ってゆく文脈に利用されている構図が、浮かび上がるのである。

結論に代えて

以上、「有明の別れ」後半の作品構造を、当初叙述の中心とされていた登場人物（左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開）の文脈から読み取ってきた。この検討を通じて、作品構造に関する結論が二点得られる。

第一に、作品構造における左大臣への出生告白の重要性である。

出生告白は、従来指摘される通り、叶わぬ恋のとどめ、或いは超常的な「亡父右大将」の血筋・資質を継承しなかつた衝撃等、家の継承・繁栄の役割に翻弄される左大臣の姿を、血脈確認の展開に伴い浮かび上がらせる意味合いを持つだけでなく、作品構造の次元では、出生の秘密に気付かない事を前提にした実子としての役割に、終止符を打つ結果となつていゝのではないか。家の継承・繁栄遂行の役割が不変なのは当然ながら、様々な局面に応じ、女右大将と血筋の繋がりもあるかのような連続性・親和性を發揮しての役割は終わりを告げたものとみられる。その際、作品末尾が書かれざる告白となつてゐる天理本の現存形は、〈左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開〉で多様な意味合いの可能性を残したままの作品の結末として、注目されよう。

第二に、中心人物左大臣と春宮をめぐる作品構造の特徴である。巻二では、作品前半の主人公である女右大将の男装時の生活をめぐる後日譚のため、血筋の繋がりもあるかのような「子」左大臣像が、意図的に展開されてきた。これと対照をなす形で、巻三に入ると、〈類例〉中宮への出生告白のエピソードを転換点として、春宮が作品前面で類い稀さを次第に強調される過程において、比較対象とされていく叙述傾向が見受けられる。それは、叙述の中心となる登場人物が単に移り変わっただけではない。女右大将から春宮への継承が待望されたのは、主人公にふさわしい資質（光）であつた。その内実として、血筋の繋がり前提となる比類なき容貌の相似・超常的な笛の才や政道の心得だけに留まらず、本来

女右大将にはない要素——左大臣の領域たる性愛で優越する男性性——までも求められた結果ではないか。この（光）継承の過程において、左大臣が巻二当初に続編主人公の装いで登場し、春宮に先行して活躍し、名義上の父子関係を利用した叙述により、比較対象として春宮と同じ俎上に乗せられたものと考えられる。今後、男装の姫君をめぐる作品全体の構造として、さらに検討する必要があるう。

注

(1) 本文引用は、大槻修「有明の別れ——ある男装の姫君の物語」(創英社、昭54)に拠る。私に表記を改めた所もある。

(2) 樋口芳麻呂「有明の別論」(平安時代の作家と作品)平4

(3) 天理本末尾文における「はんべり」の使用、巻末歌の作者、作中歌を収録する「風葉和歌集」の末巻散逸、「我が身にたどる姫君」の女帝への影響に関する問題が、冒頭における原應の問題と共に残されている。

(4) 大槻修「女大将・一人二役の早変わり」(中世王朝物語の研究)世界思想社、昭54・12初出、辛島正雄「在明の別」覚書」(中世王朝物語史論上巻)笠間書院、平2・10初出、小嶋菜温子「有明の別れ」と「源氏物語」(平安文学論集)風間書房、平4、大倉比呂志「有明の別れ」論」(学苑)701、平10・9)

(5) 以上は大槻修「在明の別の研究」(桜楓社、昭44)、徳江純子

- 【中世王朝物語・御伽草子事典】「主人公」(勉誠出版、平14)
- (6) 野村倫子「侍従考」【物語研究第2集】新時代社、昭63)
- (7) 神田龍身「物語史への一視角」(文学・語学)101、昭59・4)、横溝博【中世王朝物語・御伽草子事典】「系図的想像力」
- (8) 岡本美奈【中世王朝物語・御伽草子事典】「有明の別れ」。ただし、掲出例「もとの関白」は左大臣の名義上の祖父大臣であり、該当しないのではないか。
- (9) 大槻注(4) 論文、神田注(7) 論文
- (10) 神田龍身「仮装することの快楽、もしくは父子の物語」【物語文学、その解体】有精堂、昭61・12初出)、横溝注(7) 論文。また、関白は子沢山である事が、嫡子三位中将に先立たれた際に述べられており(P.432)、実父側の必要性もない事が明らかである。
- (11) 神田注(10) 論文、西本寮子【「在明の別」再考】(「中古文学の形成と展開」和泉書院、平7・6)
- (12) 大槻注(4) 論文、竹原邦子【「在明の別」の奇瑞再考】(語文(日本大学))113、平14・6)
- (13) 横溝注(7) 論文
- (14) 神田注(7) 論文は散逸「とりかへばや」古本の影響を指摘。
- (15) 以下、竹原注(12) 論文で、「かの御あたり」を関白の子息とする大槻注(1) 書の解釈に沿い指摘する。なお、権中納言については、今西英麻【「在明の別」の「権中納言」について】(「古代中世国文学」17、平13・9)を参考にした。
- (16) 「告げん」の部分は、大槻注(1) 書・鎌倉時代物語集成で「つけて」と校訂する。
- (17) ただし、実際の血縁関係では、左大臣は女右大将の従兄弟にあたり、同じ(ゆかり)とみなす事が誤りというわけではない。
- (18) 大槻注(4) 論文
- (19) 辛島注(4) 論文
- (20) 出生の秘密に気付いている薫が、周囲の「父子」比較の言及にも拘わらず、故光源氏への思いを殆ど言及しない(椎本・宿木巻のみ、新全集五・P.199・395) あり方とは対照的である。
- (21) 大槻修「内大臣・人生の斜陽を悟って」(「中世王朝物語の研究」世界思想社、昭54・11初出)、神田注(10) 論文
- (22) 見るだけの恋という点では、光源氏の藤壺宮思慕・狄衣の源氏宮への叶わぬ恋以上に近似していよう。
- (23) 竹原注(12) 論文
- (24) 松浦【「有明の別れ」の笙の笛】(「論究日本文学」69、平10・12)等参照。なお「とりかへばや」の影響も他論で指摘がある。
- (25) 神田注(7) 論文
- (26) 竹原注(12) 論文
- (27) かつての「妻」対の上への告白の場に居合わせた女房には、女右大将の乳母子「中納言」や「少将」「少納言」がいる。作品後半では左大臣とも関わる女房達だが、出生関連での言及はない。

(28) 西本注(11) 論文

(29) 竹原注(12) 論文。楽継承の過程としては、小嶋注(4) 論文が指摘。

(30) 西本寮子『在明の別』の成立期について(『国文学攷』111、

昭61・9)。政道の重視は、『源氏』の夕霧における学問重視の

影響以上に、院政期頃の時代的な傾向として考えられる。

(31) 西本注(30) 論文では、院・女院夫婦並立の時代性を論じる。

(32) 小嶋注(4) 論文、西本注(11) 論文

(33) 鎌倉時代物語集成本文に拠る。大槻注(1) 前掲書では、「いつかしかる」に翻刻した上で、「はづかしかる」へと校訂する。

(34) 小嶋注(4) 論文、松浦注(24) 論文参照。

(35) 竹原注(12) 論文

(36) 神田注(7) 論文

(37) 嵯峨行幸・行啓と左大臣への出生告白の間に置かれた祖父大臣死去の際には嗣子としての服喪と氏長者任命が述べられる。

(まつうら・あゆみ 甲南女子高等学校非常勤講師)